

Title	第29回岐阜外科集談会演題
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1964), 33(3): 700-702
Issue Date	1964-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/205715
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

たが、剖検を行なえなかつた。

症例2：6才11ヵ月男子。1ヵ月前より左下肢痛、跛行あり8月17日入院、左下腹部に腫瘤を触れた。試験開腹により腸腰筋腫瘍とわかり、試験切除標本によ

り横紋筋肉腫と診断した。家庭の事情で放射線療法を行なえず、マイトマイシン20mgを注射して腫瘤の縮小、疼痛の軽減を見、現在マーフィリン注射を行なつて経過観察中である。

第29回岐阜外科学集談会演題

日時 昭和39年2月19日(水)午後5時30分

場所 岐阜医科大学附属病院C講堂

1) 診断に難渋を極めた脳腫瘍の1例

岐阜医大第2外科

竹内克郎・山田慎一郎

症例は46才の男性で昭和16年頃よりWa反応陽性で駆梅療法を行なっていたが、約3年前より左半身の知覚運動障害、頭痛等を訴え、次第にその症状は程度を増し歩行困難となり入院。脳血管写にて右前頭側頭部に腫瘍の存在を確認。約1ヵ月間の駆梅療法の結果症状の軽快を認めたが駆梅療法中止後約10日間で症状の再発を認めたので脳梅毒腫を疑つて開頭術施行。摘出腫瘍の組織像より腺癌の他臓器よりの転移と判明。術後原発巣の探索には身体各所の検査を行ない左肺下葉に癌の原発巣を発見したので肺癌の脳転移を中心に若干の文献的考察を加え、転移性脳腫瘍の診断経過を紹介する。

2) 私共の行なっている兎唇形成手術について

岐阜市民耳鼻科

米倉英明・水谷泰吉

加藤健彦

岐阜大口腔外科

後藤和光

最近2年間に行なつた兎唇形成手術30例について報告した。即ち偏側兎唇初回手術で畸形の程度の強い例にはLe Mesurier, Randall, Veau-Trauner, Millard法を用い、再手術や畸形の程度の小さいものにはTenison法を行ない、又両側兎唇に対してはVeau並びに高木の並列法を行なつた。

術中気づいた2, 3の点を述べ、更に術後の成績から各手術法について比較検討し見解をのべた。

3) 最近経験した腹部内臓皮下損傷の数例に

ついて

岐阜市民病院外科

米谷 祿・安江幸洋

症例1 10才男子。自動車がバックして腹部を打撲、4時間後より腹痛嘔吐を来す。腹部は全般に膨隆特に左季肋部に圧痛著明、腹壁の緊張、ブルムベルク氏徴候を認む。受傷後20時間で開腹、腹腔に約1000ccの血液あり脾臓破裂を認めた。脾臓剝出術を施行し治癒した。

症例2 26才男子。乗用車にてオート三輪と衝突し腹部を打撲帰宅後腹痛増強し悪心を伴う。右側腹部上腹部に圧痛腹壁緊張、ブルムベルク氏徴候著明に認め受傷後21時間で開腹、腹腔に60ccの血液あり上行結腸間膜に血腫を認めた。

症例3 28才女子。歩行中軽三輪と衝突し右側腹部に圧痛抵抗あり純血尿を認む。右腎損傷にて保存的治療を行い治癒した。

症例4 54才女子。自動車とコンクリートで腹部を狭圧、受傷後4時間で開腹、小腸の破裂を認め縫合し治癒した。

なお本症は恥骨骨折を合併していた。以上4症例を報告し診断等につき若干の考察を行なつた。

4) 腹壁深部慢性膿瘍の2例

岐阜医大第1外科

国藤三郎

腹壁深部に発生した慢性膿瘍2例を経験したので報告する。

第1例は38才男子で、主訴は右上腹部圧痛性腫瘤であつた。術前診断は腹腔内腫瘍で開腹により腹筋と腹膜との間に発生した膿瘍で、膿の培養により一般細菌も結核菌も証明されなかつた。肉芽組織の組織像では慢性炎症性変化を認めなかつた。病歴に右上腹部の外

傷があつたのでこれが膿瘍発生に関係あるものと考え、膿瘍は切開排膿により治癒した。

第2例は17才女子で主訴は2、3週來の右上腹部無痛性鶏卵大の腫瘤で穿刺により膿を証明、膿の培養により gram 陽性桿菌及び陰性の桿菌を証明したが、結核菌は培養により認めなかつた。穿刺排膿及びP.C.及びS.M.の局所注入により治癒せしめた。

5) 急性胃捻転症の1手術例

岐阜医大第1外科

関野昌宏

患者は70才、男子。

6日前、食後、嘔気、嘔吐、上腹部の膨隆を來して來院。発病以來便通はない。生來の大家家であり、平素から便秘がちであつた。

所見：上腹部に成人頭大、境界鮮鋭な膨隆があり、打診上鼓音を呈し、この部では腸雑音の聴取不能である。

レ線検査にて臓器軸性間膜軸性結腸上前方及び後方胃捻転症と診断された。

治療：Billroth II法により胃切除術を行なつた。

転帰：全治退院。

素因及び誘因：肝十二指腸靱帯の弛緩、胃拡張、食事摂取による胃蠕動亢進、便秘。

6) 遺伝性濃厚なる先天性幽門狭窄症例

岐阜医大2外科

国枝篤郎・三島敏雄

兄弟2人が相ついで本症に罹患し、しかもその家系に濃厚な遺伝関係が認められ、遺伝的因子が本症発生に何らかの役割を演じていると考えられる症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

症例は同胞3人で、第1子は女で特に異常なく発育したが、第2子は男で母乳栄養。生後25日目より嘔吐を來すようになり、生後90日目に全く羸瘦して來たので、Ramstedtの手術を施行、術後嘔吐なく全治した。第3子も男で母乳栄養。生後1ヵ月頃から噴水様嘔吐を來し、生後50日目にRamstedt手術施行、術後4～5日目に軽い嘔吐があつたがその後順調に発育した。この症例の父親は双生児で、2人共乳児期に噴水様嘔吐を來し一方は死亡している。その他祖父、伯母、従兄弟にも嘔吐の病歴があるという。

7) 当教室に於ける胃癌の統計的觀察

岐医大第1外科

渡辺 裕・石盛栄吉

河合寿一・国藤三郎

関野昌宏・楡垣 潜

山本英治

昭和28年から昭和37年までの過去10年間に、当教室に入院した胃癌患者は、249名である。男女比は2:1で最高年者は80才女、最年少者は21才男、3人以上の濃厚なる癌血縁者を認めるものは16.9%も認めた。初発症状は上腹部不快感、膨満感、疼痛の不定症状が多く、腫瘤触れるもの61.7%、胃液遊離塩酸欠如、低下するもの91%、潜血(+)81.3%であつた。

手術率は95.2%、そのうち胃切除術施行したもの69.5%で、遠隔成績を見ると内臓的には、Borrmann III、IV型の生存率はI+II型に比してかなり悪く、腫瘍の大きさでは鶏卵大以上のものが、PC分類ではPCI、IIの予後が悪かつた。

胃切除の遠隔成績は3年以上経過した切除全例に対する3年生存率は29.7%、5年生存率は22.7%であつた。

8) 閉鎖性黄疸に就いて

大垣市民病院院長

森 直之

昭和36年6月より昭和38年12月迄の胆道疾患145例に就いて統計的觀察を行なつたが、その内主として閉鎖性黄疸について述べた。即ち閉鎖性黄疸は総計28例(モイレングラハト15単位以上)あつたが、内胆石症に起因するものは12例であつた。腓胆道腫瘍に起因するものは13例で胆石症手術死亡例は0であり、他の報告に比して良好であるが、これは原則として総輸胆度ドレナージを行わず、その必要ある場合は全て内瘻に依存したためであろうと考えられる。腓胆道腫瘍による閉鎖性黄疸は肝内外を問わず、全てバイパス法によつたが、予想外に長期生存例があるので、好的な例があれば勿論腓十二指腸切除術を行なうべきである。が実際の臨床上バイパスが却つて生存年令が長いのではないかとその有効性を主張した。

9) S字状結腸ポルブルスの3例

大垣市民病院外科

森 直之・蜂須賀喜多男

浅野多一・寺本勲男

松永吉和・森 直 和
加藤量平

急性イレウス症状を呈して来院した老年男子3例の巨大S字状結腸症について、その手術的、組織学的所見から発生原因は慢性ホルプルスであろうと考えられた。又文献的考察も加えて報告しました。

10) 巨大なる乳児水腎症の1例

岐阜医大2外科

国 枝 篤 郎

症例 6ヵ月男子。満期安産で順調に発育していたが、生後5ヵ月頃の健康診断で手拳大の腹部腫瘤を指摘されその後急速に増大して来た。気嫌はよく多少便秘を認めるのみであつたが、次第に哺乳量も減少し、嘔吐を認めるようになった。腹部は一般に強く膨隆し左側腹部に小児頭大の腫瘍を触知した。血液、尿に異常所見なし。手術時少量の腹水を認め胃腸は強く右上

方に圧排され、左腎が腎実質は全く菲薄となり拡張した腎盂と共に球形嚢状となり小児頭大であつた。内容約1l、尿管は特に拡張しておらず、異常血管癒着など見られなかつた。尿管造影により腎盂尿管移行部、尿管中央、尿管膀胱移行部に狭窄せる部をみとめたが、1次的原因がどれかはつきりせず、腎機能回復の期待も出来なかつたので左腎摘出術を施行した。若干の文献的考察を加えて報告した。

11) 真性半陰陽の1例

岐阜医大泌尿器科

尾関信彦・伊藤鉦二

外陰部に異常形態を認めるが、17才、女子として生育した患者で検査の結果本症と確認して、内性器及び陰莖切断術、外陰部整形術を施行した。内性器の組織学的検査では両側ovotestisであつた。本例は本邦第2例目のものである。